

ちゆんが教えてくれたこと

私には、弟が二人いる。四才下の弟と、七才下の二才になった弟。四才下の弟とは、仲がいいのか悪いのかわからない。ゲームやトランプをするときは、友達のように遊ぶけれど、でも勝手に私の机をあさってくるのは絶対にゆるせない。私のお気に入りのシールを勝手に貼られていたり、いたずらされることが多いからだ。本当にいやだ。まあでもいい。上の弟のことはおいておこう。

今回書きたいのは、二才の弟のこと。その名も「ちゆん」。本当は「しゆん」という名前だけれど、みんなは「ちゆん」と呼ぶ。「ちゆん」も自分のことを「ちゆん」だと思っている。私は、とにかくこのちゆんが、かわいくてたまらない。

ちゆんはずっと、私のあとを小鳥のようについてくる。一生けん命まねをしてくる。追いかけてっこをしたり、でんぐり返しをしたり、折り紙をしたり、歌を歌ったり。だけどうまくできなくて、しっぱいしたりする。そんなとき、みんなで大笑いする。それもかわいい、とにかくかわいい。

母によると、ちゆんは言葉を覚えるのが早いらしい。二才にしては、よくしゃべるといふ。私もそう思う。ちゆんとはもうすでに会話ができる。

「きょうのごはんなり〜? やったー!」

「ちよっとまって。これちゆんのおかしじゃない?」

なんて口ぐせのように言っている。これも全部私のまねである。

それもそのはず、ちゆんに言葉を教えたのは私なのだ。

でも、私はちゆんとちがうところがある。それはすぐに「ありがと」と言えるところだ。ちゆんはいつも「ありがと」と言ってくれる。冷そう庫の飲み物を取ってあげたときも、おかしを分けてあげたときも、おもちゃをかしてあげたときも、すぐに「ありがと」と言ってくれる。私はそれを聞いて、いつもうれしくなる。大したことをしているわけでもないのに、いつもいつもにたりつと笑って言ってくれる。そしてまた、ちゆんになにかしてあげたいと思ってしまう。にくいやつだ。かわいすぎる。

では私はどうか。母にわすれ物を学校に届けてもらったとき、私は母に何も言わなかった。それどころか、言いわけをしてしまった。そのときの母の悲しそうな顔は、今でも覚えていす。私はこのときちゆんのことを考えた。ちゆんだったらきつと、いつもの笑顔で、「ありがと」と言っていただろう。そして母もいつも私が思うように、少しはうれしく思ってくれたかもしれない。「ありがと」と言えなかったことで、こんなにも悲しい出来事になってしまふことに私はおどろいた。

私はちゆんに言葉を教えていたようで、実はとても大切なことをちゆんに教わっていたのだと気づいた。私もちゆんのように、すぐに「ありがと」と言えるようになりたい。

「お母さん、いつもありがと!」

まつした
芽生